

ベルクソンにおける知覚的「所与」と知覚的意味*

木山 裕登

1. 導入

『物質と記憶』第一章においてベルクソンは、「記憶力の寄与を排除した知覚」と規定される「純粹知覚」の概念を用いて知覚の理論を展開する¹。彼は、実在的な作用・反作用 *action, réaction* の全体の想定から議論を始め、その全体のうち生物の関心を引くものが選別されると、その選別だけによって、即ちそこに何か別のものが付与されることなく、純粹知覚が成立すると説明する (MM, 31-5)。

しかし以上の主張はいくつかの問題を引き起こすだろう。ここでは、そのうち知覚的「意味」に関するものを扱いたい。というのも、ベルクソンの知覚論に対する最も重要な批判のひとつは、まさにこの点、即ち「単なる作用の次元のみに基づく理論は、知覚が意味を帯びていることを説明できないのではないか」という点に向けられたものであると思われるからである。この批判に応えるには、これが問題にしている知覚的な意味、特に純粹知覚のそれを考察する必要がある。

そこで、まず、上述の批判を簡単に確認した後、それを梃子にして、何を問題とすべきなのかを明らかにし、考えるべき問を定式化する (2 節)。次いで、ベルクソンの「一般性」の考え方に注目してこの問に応えることを通じて、「知覚的意味」と呼んで良いだろうものと知覚所与の内容との関係を明らかにする (3 節)。最後に、このとき「知覚的な意味」がどのような構図の下、どのようなものと考えられることになるかについての問題を提示して今後の展望を示したい (4 節)。

2. 批判と問題の所在

まずは先述したような批判を具体的に確認しておく。例えば『行動の構造』のメルロ＝ポンティによると、作用・反作用の次元だけで議論される以上、純粹知覚の内容は、単なる物的過程もしくはそれに一対一対応した「感覚のモザイク」ないし「要素的感覚」²といった、単に雑多でしかないものである。そして彼は、ベルクソンの理論のこうした理解に基づいて、「感覚のモザイク」の次元そのもの

においては「意味」を語ることはできないが、どんな意味をも欠いた過程を「知覚」と呼ぶことはできないだろうから、こうした過程から「意味を付与された知覚」を構築する必要が生じ、そのために「欲求」等と呼ばれるがその実は不可解である何らかの「力」を必要とせざるを得なくなっている、と判定し批判する³。要するに、「純粹知覚」の名の下で作用・反作用の次元から議論を始めたために、知覚における「意味」を語るためにはここからの不可解なジャンプをどうにかしてせざるを得なくなるため、知覚に関するベルクソンの議論は実質的には知覚論として受け入れがたいものでしかないと批判されている⁴。

この批判に対し、「確かに純粹知覚自体は意味を欠いた非知覚的過程であるが、しかし記憶力が介入することで知覚的な意味の成立が可能となる」と言っても十分な擁護にはならない⁵。というのも、こう言うだけでは、なぜ非知覚的過程が「知覚」に影響を与えることができ、意味を欠いた過程が意味を付与する力（例えば記憶力）に干渉できるのかが不明のままであるが⁶、何か言われるとしても否定による議論にとどまると思われるし⁷、そもそも純粹知覚の内容に関して、せいぜいがそれはあらゆる知覚を超えた何か、「直観」によって直接触れている何かとされる程度で、それ以上肯定的に語る事ができていないからである。

また、純粹知覚や「運動図式」に関するテキストを引用することで上述の批判を単に否定するのは簡単だが、それだけでは上で提示した批判に対する議論としての有効性はない。例えば、『物質と記憶』第一章では「諸対象は、それらの実在的作用の何がしかを放棄するだけで、それらの潜在的な作用、即ち結局のところは生物のそれらに対する可能的作用を描く」(MM, 35) 等と言われ、また第二章では「習慣によって確立された感覚運動的な連結が、通常の状態 [= 神経の損傷等のない状態] では、音の連続を分解する役割を担っているはずである」(MM, 126-7) 等と言われる⁸。知覚は知覚主体に可能な行動を反映したものであり、知覚対象は主体の行動の相手という仕方で分節化されたものであること、そしてこの分節化は、習慣によって、受け取られた印象に一定の運動が後続させられるようになること（「運動図式」）でなされていると言われているのである。こうした論点は、もちろん重要ではあるが、しかしそれだけでは上に掲げた批判に応えられないと思われる。というのも、行動の相手として一定の対象を分節化すること、一定の印象に一定の運動を後続させることが、純粹知覚という作用・反作用の次元だけでいかんして可能となっているのかを問う余地が残っており、そしてもしここで問題となっている純粹知覚や「印象」が例の「感覚のモザイク」でしか

いなら、「行動」や「習慣」と言ってみたとこで、「それらが可能となる為に、諸所与を統一する力のような不可解な働きに頼らざるを得なくなってしまうのではないか」という先述の批判を続ける余地が残っているからである。

では何を考えるべきなのか。上述の批判は、ベルクソンが、知覚の内容を捉える上で、どんな意味をも欠いたような「感覚のモザイク」を出発点に据えているとの解釈に起因していた。したがってこの解釈が否定できれば良いだろう。つまり、知覚の出発点となる知覚的所与を問題にすべきだと考えられる。扱うべきは以下のような問である。ベルクソンにおいて知覚、特に純粹知覚は何を与え、知覚的な意味はどのようにして可能となると考えられているのか。知覚の与える所与は何らかの「意味」を帯びたものと言えるのだろうか、そして言えるとしたらそれはどのような条件の下でのことなのだろうか。

3. 一般性と意味

この問を扱うには『物質と記憶』のどの議論が有効だろうか。使えそうなものとして直ちに思いつくのは、知覚に関する議論の多い第一章や「運動図式」に関する議論の多い第二章であるが、前節で述べた理由からこれらは不十分に思われた。そのためには少し別の角度からの光が必要である。そこで本稿は、第三章の「一般観念」論の前半に注目したい。これを用いることの有効性は、(主張そのものというよりは) 主張が対峙している問題が何であるかを考えることで明らかになると思われる⁹。そこで本節では、まずその有効性を理解するために、この議論の問題意識、それへの答え、その答えの意義、という議論の外枠を明確にする(3.1-3.2 節)。次いで議論の中身に入り、それがいかにして可能になっているどのようなものであるのかを考察し(3.3-3.4 節)、最後に以上の議論を純粹知覚概念に適用し、前節末尾で定式化した問への答を提示する(3.5 節)。

3. 1 「一般観念」論は何を問題とした議論なのか

「一般観念」論は「草食動物を引き付けるのは草一般である」(MM, 177) というフレーズで有名なものである。しかし、このフレーズを含む一連の議論は、どのような問題意識の下、どのように立てられた問に答えているものなのか。この点を押さえておかないと、一連の議論を把握することで何を理解したことになるのか、要するにこの議論の意義が、分からないままだと思われる。

まずは「一般観念」論の議論領域とその導入の概観から始めたい。「一般観念」論と言っても、これが扱うのは一般観念の一部であって、「ここでは諸々の一般観念に関する問を一挙に解決することが問題なのではない」(MM, 173)。扱われるのは、「知覚を唯一の起源としない」(MM, 173)ものを除く、「類似の知覚と呼ばれるものに基礎をおく一般観念」(MM, 173)に限定されている。本稿は考察対象をさらに限定して、「一般観念」概念そのものは扱わず、「一般性」の概念に的を絞る。さて、例えば目の前に複数の椅子があるとする。これらはよく見るとそれぞれ異なっている。にもかかわらず、これらをすべて「椅子」と見做している。「椅子一般」に出会っているのだと言ってもいいだろう。ではこの出会いはいかにして可能となっているのか。「椅子一般」は、それがすでに認知されたものから分離された部分(例えば「椅子」の背もたれ)ではなく一般性を持つ要素としてその認識が説明されなくてはならないものである以上、単に意識を或る一か所に集中させる注意で得られるものではない¹⁰。一般性を帯びたものの認識には、このように、単なる注意とは異なる「何か」が必要となる。さらに、この「何か」に関してベルクソンは「我々が(例えば椅子の)一般観念を有して、それを個的で雑多な知覚的所与へ適用するのだ」と単に言うことで説明が成功するとは考えない。この適用が適切に行われるのは一体いかにして可能なのかという問題に困難が先送りされるだけだからである。『物質と記憶』の定式化によるなら、「一般化するにはまず抽象できるのでなければならぬが、有益な仕方では抽象するためにはすでに一般化できるのでなければならぬ」(MM, 174)という悪循環である。即ち、一般観念を一般化に求める「外延からの議論」と、抽象に求める「内包からの議論」との対立に追い込まれる。外延からの議論は、一般観念を「各々の間には共通性を持たない諸個物(=外延)に適用される、同じ語」と定義するが、しかし「個々の外延から一般化によってその語に移行するには、あらかじめその語の適用範囲が分かっていると、つまり結局は共通な質が分かっていると、不可能である」という困難を抱え、結局内包的定義に移行する。他方の内包からの議論は、一般観念を「個的事物から抽象されることで得られる、ある種類 genre を代表する質(例えば「白さ）」と定義するが、しかし「諸個物からその質だけが抽象されても、それはもとのまま個別的であり(百合の「白さ」と雪の「白さ」、さらには「この」百合の「白さ」と「あの」百合の「白さ」は、各々異なる)、一般観念への移行にはそれら多数の個的質を自らの下に集めるところの同じ語を与える精神の別種の働き、一般化する働きが必要になる」という困難を抱え、結

局外延的定義に移行してしまう (MM, 174-5)。「一般観念」論は、以上のような困難に陥る立場の告発から始まる。そしてベルクソンは、これを回避すべく、以下で述べる「目を引く質の感得」というアイディアを提示する。

しかし、その検討に移る前に、このようにして導入される議論が何をどのように問うた上で展開されているのかを明示化したい。「一般観念」論に続く箇所では、この論によって「観念連合の法則を演繹することができる」(MM, 182)とされている。ところで、この法則が得られるためには、「みなが何らかの側面では現在の知覚に類似しているところの無数の記憶内容のあいだで、選別がいかんに行われるのか、そしてそれらのうちのただひとつ—あれではなくこれ—がなぜ意識の光にてらされて現れてきたのか」(MM, 182)に答えることができなくてはならないだろう。そして、まさにこうした問への答を準備するのが、「一般観念」論の特に前半なのである。したがってここで問とされ答えることが試みられているのは、現在の知覚に他ではなくこの記憶内容が適切に介入することができるための条件であると言える¹¹。これは、記憶内容の適切な介入が可能であるためには、知覚における第一の所与はどのようなものでなければならないのかを問の一つとすることに等しい。そしてこれはまさに本稿が主題として掲げた問に他ならない。

3. 2 提示されるアイディア：「目を引く質の感得」

ところでベルクソンは、先ほど「悪循環」に陥るものとして告発された考え方が「個的なものから出発していかに一般的なものに至れるか」という問を共通に有しているとし¹²、この共通公準の否定を梃子にして自らの主張を述べる。

それゆえ我々は、個物 *l'individu* の知覚からでも類 *genre* の概念からでもなく、中間的な認識から、即ち目を引く質 *qualité marquante* ないし類似の不判明な感得 *sentiment confus* から、出発していたのだと考えられる。この感得は、完全に概念化された一般性からも明瞭に知覚された個性 *l'individualité* からも等しく隔たっており、これら両者を分離によって生み出すものなのである。反省的分析がこの感得を一般観念へと純化し、識別的記憶力がこの感得を個物の知覚へと凝固させる。(MM, 176)

個々無際限に異なる「個的なもの」と、それに統一を与えるような類の概念ないし「完全に概念化された一般性」との二項は、「反省的分析」や「識別的記憶力」

の介入を経て初めて得られる二次的なものであって、知覚は第一にはこれら二項の「中間」にある「目を引く質の感得」であると言われている。しかしこのように言うことで一体何が主張されているのか。それは、この主張がどのような問に対峙しているのかを思い出すなら明らかである。二項やとりわけ「個的なもの」を出発点に据える考え方の否定はしばしば注目されるが¹³、しかしこの否定の真の重要性は、それを通じて、知覚における順序関係が整理され、第一の所与が何でなければならぬのか¹³が明かされている点にあると考えられる。二項に代えて提示される「目を引く質の不判明な感得」は、「個的なものから出発していかに一般的なものに至れるか」という問への答としてではなく、こうした問そのもの、より精確にはこうして立てられる問の一項を成している「出発点」(＝知覚の第一の所与)こそを問題化した上で、それが何でなければならぬのかに対する答えとして主張されているのである。ではそれはどのようなものなのか。

3. 3 それは何を条件として要請するものなのか

それは、それ自身は何だかよく分からない感情のようなものではないはずである。ところで、まさに先の引用箇所¹³のすぐ後に例の「草食動物を引き付けるのは草一般である」(MM, 177)というフレーズが来る。ここではある種の「一般性」を帯びたものが問題となっているのである。したがって、例の「感得」の性格を理解するには、ここで問題となっている「一般性」がいかにして可能となると考えられているのかを理解する必要があるだろう。先述した議論構造から明らかのように、これは一般観念の適用に基づくものではない(むしろそうした適用の可能性の条件となりうるものが問われていた)。とはいえもちろん、例えば「これこれの特徴があるものを前にすると、これこれのものが認知される」といった仕方¹⁴で、幾つかの対象が特定の特徴を共通に持っているから、共通する一般的性質が認知される、ともできない。というのもこのとき、諸対象は当の特徴以外に無数の特徴を持っているのだから、獲得したいと思っている当の一般性を密輸入し、それを知覚される事物の中に置き入れ、知覚される一般性をそれによって説明するという論点先取がおかされているからである。ベルクソン自身、そうした説明が「問われている事柄を前提にしている点で、また結局のところ、抽象観念を自分に与えた後で抽象を生み出そうとしている点で、誤っている」¹⁴ものであるということは『物質と記憶』に先立つ講義でも次のようにして指摘されている。

ここでは、一般観念の実在性についての問題を解決しようとしているのではない。そうではなく、ここでは、抽象を説明するのがこの共通の特徴の認識や予感ではなく、ましてやその現実存在 l'existence でもないということを「示そうと」しているのだ。諸々の習慣と態度を伴った我々の身体は感覚的には同じままであるということ、自然が提示する無制限 illimité の数の光景を前にして、我々の身体は、まさにその構造そのものからして限られた limité 数の構えをしか、そしてこう言ってよければ態度をしか取れないということ、これらのことを指摘すれば十分である。(Bergson 1992, 391)

物理的に言えば異なる無数の対象に対して、生物は「同じ」構えないし態度をとる。同じ仕方で反応行動 réaction をする。一般性の認識を説明するのは、実在する共通の性質（仮に実在するとしても）でも、物理-化学的的刺激作用の与える要素的感覚ないしそれを統一する不可解な「力」でもなく、「反応行動の同一性」だと言われている¹⁵。「ある特定の同じ仕方でそれへと反応行動するところのもの」という仕方で、「ある特定のもの一般」が成立すると考えられているのである。『物質と記憶』だと次のように言われる。

[...] 周囲の他のものは何の影響も持たないままなので、抽象をする必要はない。表面的には異なる作用に対する反応行動の同一性こそ、人間の意識がそれを一般観念へと展開するところの萌芽なのである。(MM, 178)

「表面的には異なる作用に対する反応行動の同一性」が一般性の出発点であると言われている。さて、ここで重要視すべきは、「行動」という要素そのものというよりは、この同一の反応行動が「何らかの個的なものを想定した上で、そのうちの或る類のものに対してはこれこれの反応行動を、別の類のものに対しては別の反応行動を、どうにかして行う」という仕方で成されるものと捉えられてはいない点である。引用で「抽象を必要としない」と言われていたことの意味について考えよう。「他のものが影響を持たないままだから」と言われていた。しかし何故そう言えるのか。それは、上述した仕方で知覚に関する問題化の下で、抽象が必要となる描像そのものが否定されているからである。どういうことか。なるほど、もし知覚において最初に与えられる内容が、各々無際限に異なる個的なものであるとするなら、定義からしてそこには一般性はなく、これの獲得にはそこ

からの「抽象」等の働きが要請されることになるだろう。しかし、「知覚の第一の所与はどのようなものであるのか」こそが問題とされ、「反応行動の同一性」でもって答えられていた。まさにこうして可能になるものこそが知覚の第一の所与なのであって、そこから抽象が必要だと考えられるような「個的なもの」が知覚の一構成要素としてまず与えられているのではない。

では、知覚的所与がこうして帯びている一般性はどのような性格を有していることになるのか。

3. 4 知覚的意味としての一般性

これまで触れてこなかったが、ベルクソンは、一般性の条件としての「行動」とは生物の行動であり、「目を引く質」が「目を引くもの」であるためには、問題となっている行動が生物の「関心や欲求」に応じたものでなければならないと考えている¹⁶。生きており、様々なものの探索や回避という行動をしなくてはならないものとしての生物が持つ関心や欲求が、その生物にとって有用なものとしてでないもの、回避すべき危険なものとしてでないもの等といった行動の相手として、諸物体を区別・識別するよう仕向ける。例えば下等な生物でもすでに、自分の存在する環境の中で餌や天敵をそうでないものから区別し、それら各々をひとつの対象へと区別している。あるものを知覚することとは、原初的には、まさにこうしてある特定の関心や欲求に相関するものとそうでないものとを分節化することに尽きるのであり、このとき、知覚対象であるとは、関心や欲求に応じて「ある同じ仕方でそれへと行動できるところのもの」であるということのみに存している。つまり、知覚的所与とは「特定の行動の相手となるもの」一般（例えば草を食べる動物である草食動物にとっては、草一般）である。前節の議論を踏まえるなら、知覚的所与は、こうして関心や欲求に応じた一定の観点から分節化されたものとしての一般性を、原初的に、即ち後からどうにかして付け加えられるのではなく、すでに帯びているという仕方で、持っている¹⁷。あるいは、眼前の知覚対象は、それがそもそも知覚対象であるためには、なまの個物ではなくて「ある^{クラス}集団の一員としての個体」¹⁸でなければならないのだとも言える。

このとき知覚されるものは「意味」を帯びたものとなっているだろう。ここで問題となっている一般性は、単なる物理的過程でも、いわゆる雑多な「感覚」でもなく、関心や欲求に応じた行動の相手一般のそれである。したがってこうした一般性を帯びた知覚的所与は、例えば「食べるべきもの」、「回避すべきもの」等

といったいわば生命的な意味を帯びた仕方でも成立しており、知覚はそれを介して外的実在を把握する働きであると言えるからである。眼前の知覚対象は、それがそれとして成立するためには、あるクラスないし類に属するものとしてあるのだからなければならない。このとき、知覚的意味を理解しているとは、行動の結果どのような結果が生じるか（食欲が満たされる、休める、身体が破壊される、等）が分かっていること、あるいはそうした結果を生じさせることが可能ということであり、これは実際に行動を行うことで確認されたり棄却されたりするだろう。しかし、今まず確認しておくべきは、知覚がどのようにしてこのような意味を帯びたものであるのかである。知覚的所与の内容そのものを問題化する「一般観念」論は、各々が無際限に異なるような個物として知覚の第一の所与を想定すること、そしてこれから帰結する「意味」を「意味を欠いた所与」とは別のところから付与されるものと見做さざるを得なくなる考え方、二項をまずこのように想定する考え方そのもの、これらを否定し、「特定の関心や欲求に応じるもの」という意味を原初的に帯びたものとして知覚的所与を捉え直したのであった。「目を引く質の不判明な感得」とはこのような仕方での外的実在の把握であると考えられる。

3. 5 純粹知覚概念に対する批判への応答

本稿のここまでの議論は、純粹知覚の議論に適用できるし、またそうすることは有用でもある。実際これは、冒頭で述べた、作用の次元だけで「可能的行動の反映」と特徴づけられる純粹知覚と矛盾しないだけでなく、以上の議論によって、なぜこのような「知覚」が可能となるのかも理解できるようになるからである。

さて、ここで問題としている「一般性」は、適切な記憶内容の介入の可能性の条件であり、したがってここで記憶内容は基づけるものとして機能していなかった。この「一般性」は、その可能性のために、実在的な作用・反作用の次元しか要請していなかったのである。しかしそれでも、純粹知覚は単なる物的過程に一対一対応したような「要素的な感覚のモザイク」を与えるものではなく、反応行動の同一性に基づく「一般性」を帯びている。したがって、原初的な「一般性」がすでに可能となっている以上、作用の次元以外へと何かを要請しないからといって、それ自身では意味を欠いている単なる物的過程やそれに対応した「要素的な感覚」といった個的なものが前提されているわけではない。純粹知覚も、単なる物的過程には還元されえない「知覚」という活動、即ち知覚的な意味を介した仕方でも外的な実在を把握する働きであると言えるのである。

4. 纏めと展望

纏めよう。所与に対していかに働きかけて何をどのように付与するのかではなく、所与がどのようにして可能となるものであるのかが問われ、「特定の反応行動に応じるもの一般」こそがそれであるとの知見が得られた。ポイントは、所与における個的なものと一般的なものとの順序関係が問に付されることで、一般性や意味を所与そのものとは別のところからもたらされるものとみなすような、「意味」と「感覚」の二項から成る知覚理解の枠組みを否定することにあつた。冒頭で挙げた「意味を帯びた知覚を語れない」との批判は、知覚的意味が可能であるために実在的な作用の次元とは別の次元を要請せざるを得なくなるような知覚の二項構成の理解を否定し、「関心・欲求に応じた反応行動の同一性」に基づく「一般性」ないし「意味」を原初的に帯びた「感得」として知覚の第一の所与を捉え直すことがなされているとの解釈によって、棄却できる。

最後に、本稿の議論から問を進めるために、「知覚的意味」に関して引き出し得る問題の展望を指摘したい。以上の議論は単なる「主体（思弁的な諸概念の所有者・使用者としてのそれではなくとも、特定の実践的な行動能力を備えたものとしてのそれ）による対象の構成」についてのものなのか。知覚は当然それを行うものの特定の条件に何らかの意味で依存している。しかし問題は、その依存がどのようなものか、それは例えば知覚される実在に対する知覚主体の超越論的な優位性なのかどうか、である。論点を浮き彫りにするために対比軸を据えてみたい。知覚内容を構成する要素として行動を持ち出すという戦略は、例えば Noë (2004) を連想させる¹⁹。しかし重要なのは、概念と行動のいずれを重視するかというよりは、こうした基準が何を意味しているかである。そこでより重要と思われるのは、例えば McDowell (1996) である。実際、「知覚経験の内容がそもそもどのようなものでなければならないのか」を問題として、意味的に無垢な「所与」とそこに加わる「意味」という二項対立そのものを拒否することを通じて、経験が有効な経験であるためには経験にとって「意味」的な要素が本質的に構成的であるのでなければならないと考える、という議論の仕方は、この解像度で見ると彼らに共通している²⁰。とはいえもちろん、いくつかのベルクソンのようなレッテルからも素朴に連想できるように、両者は主張内容を異にしている。しかしそれ以上に重要なこととして、扱う問題をも異にしていると考えられる。二点指摘したい。

1. マクダウェルにとって「概念的である」ために必要な条件として、他の判断

や思考と合理的に影響しあうこと、他のことの理由足りえたり足りえなかつたりすることが挙げられる²¹。ところで、(彼はこの点を本格的に扱ってはいないように見えるが)これは言語抜きには難しいだろう²²。しかしベルクソンは、行動を持ち出すことで、言語使用能力への訴え抜きに議論をしている。ベルクソンは、我々がそれを介して世界を把握するところのものである「意味」を、言語が本質的に構成的ではない仕方と考えていると言えらる。よってベルクソンから次のような問を引き出せる。「非言語的な『意味』はいかにして可能なのか」。

2. 加えて、マクダウェルによると、問題となる概念能力は合理的に組織化された概念ネットワーク全体に統合されたものである必要がある。よって、諸概念の合理的連関の一部であることそのものが経験内容にとって構成的であり、このようにして初めて、今ここの意識の流れそのものとは独立の「実在」の経験が成立しうると考えられることになる²³。合理的に組織化されてある概念の網のうちに位置を持ちえるものとしてのみ、「独立の実在の経験」が可能であることになるのである。対してベルクソンにおいて、独立した実在とは、指摘だけしたように「相互作用の全体」であり、これは分節化され知覚された「物体」を引き写してではなく、それを選別結果の一部として含むような全体として、知覚にもその主体にも先立つものとして、想定されている²⁴。もちろん知覚は、知覚主体の関心や欲求に相関していて、主体と完全に独立に可能となるものではないが、しかしそれは実在的な諸作用の総体にその一部として属すること、諸作用が通過する場の一部であることによって初めて実効的なものであることができる²⁵。知覚的意味の実効性はそうした作用の結果の一部、ただし特定の観点から「選別」された一部であることによってのみはかられる。するとここでは、すでに一定の条件を有している主体を前提してその条件に一方的に基づくという仕方とは異なる仕方、外的な実在の「把握」を論じようとされていると理解できるだろう。これこそがベルクソンの問題であると思われる(この点を考慮するなら、文言だけ見れば彼と同じ立場に見える Noë (2004) も、主張内容の異同以前にそもそも彼とはまったく異なる問題の下で思考していると捉えるべきである²⁶)。もちろんこのように言うからといって、単なるカオスのようなものからの生成といったものが目指されているのではないし(実際、無際限に異なるような個的なもの前提は否定されていた)、ましてや把握される「対象」が単純に主体から独立に実在すると想定されるのでもない。「主体の有する出来上がった概念体系の適用」か「不定型な所与」か、あるいは主体による対象の構成か対象の前提か、といった二者択一を受け入

れないところで、「一般性」や「意味」といった、我々がそれによって実在を把握するところのものを、問題にすることになる。このときには、「合理的な思考」や「生物的な意味」を絶対的な経験の条件として前提した上で経験の成立を問うというよりは、それらがひとつの結果でありうるような仕方、実在的なものに根拠を持った経験がいかなる仕方、成立するのかを問にすることになるだろう。

以上を考察するためには『思想と動くもの』や『創造的進化』等における、一般性・類と法則・知性といった諸概念や、「共感 *sympathie*」などと呼ばれる奇異な認識様態の検討が必要になると思われる。これらは今後の課題としたい。

*本稿は、2012年10月13日(土)の国際シンポジウム「反時代的考察 ベルクソンと19世紀フランス哲学」(5e colloque international du PBJ)のプレイベントとして法政大学で行われた若手研究セミナーでの発表原稿を翻訳し、加筆修正したものである。批判やコメントをくださった方々に感謝します。

¹ 「あらゆる形式の記憶力を排除することで物質から直接的でかつ瞬時的なヴィジョン *vision* を獲得できる存在が持つような知覚 [...]」(MM, 31)。

² 「刺激と要素的感覚の間の一対一 *ponctuel* 対応と恒常的連結」の仮定から出発する、いわゆる「恒常性仮説」への批判である(Merleau-Ponty (1945, 9-10, 13-7))。

³ 「しかし[ベルクソンにおいて]、[...] まさに前意識的な感覚のモザイクから出発して幼児的なないし原初的な知覚の実効的な内容 *le contenu effectif de la perception* にたどり着こうと試みられている。[...] つまり、反射学説が本能的行為を、その各々が要素的刺激に対応しているような要素的反応の総計へと分解してしまうとのまったく同じように、ある特定の意識の内容を、例えば光の振動といった部分的刺激の各々に対応させようとしているのである。[...] 純粋質から原初的な融合を再構成するために、欲求、傾向、自発的注意の行為、要するに前意識的な諸々の力を導入することを余儀なくされるのだが、そうした諸々の力は、今度は構成仮説として、『諸能力』として出現することになる。」(Merleau-Ponty 1942, 178-9)

⁴ 他にも例えばバルバラスがこれと同一線上の批判をする。cf. Barbaras (2009, 83)

⁵ 例えば石井 (2001, 72, 203)、石井 (2006) の特に第二節。Riquier (2009, 339) 等。こうした考え方だけでは、バルバラスの次のような批判に耐えられないだろう。彼は、生きた主体が行うものとしての知覚における「運動」の重要性を指摘した点で評価できるとしても、知覚は実質的には精神・記憶力の産物でしかありえなくなっていると解釈し、純粋知覚概念を用いた議論はそれだけでは維持不能だと宣告したり(Barbaras (1998, 40-2), Barbaras (2006, 128-9) 等)、「知覚の分析はすべて、専ら客観の平面 *plan de l'objet* で展開されており、[ベルクソンは] 意識の実在的なものへの関係の意味を汲みとっていると主張することはできない」(Barbaras, 2009, 83) と言って批判したりする。なるほど、もし純粋知覚が知覚と分離された単なる物的過程であるなら、彼の言う通りベルクソンの知覚論は実質的には結局単なる二元論に過ぎなくなってしまうだろう。そうではなくするためには、純粋知覚を、知覚経験から分離された単なる物的過程としてではない仕方、位置づけ、これがいかなる意味で「知覚」であると言えるのかを明らかにする必要がある。

⁶ この批判を行うものとして、Merleau-Ponty (1945, 27)。

⁷ ジャンケレヴィッチが、『物質と記憶』において精神と物質の二元論は「緊張と収縮の度合いを異にする同じ一つの実在」(Jankélévitch 1959, 121) しかないと考えたことにより乗り越えられているという重要な指摘をするときも、「質を奪われた等質的空間は、物質そのものの特性ではなく、我々の用いる抽象的な図式でしかない」(Jankélévitch 1959, 120-1)、あるいは「知覚は、実在の複製を与えるのではなく、我々を物質のうちに住まわせる」(Jankélévitch 1959, 99-103) といっ

た、否定による議論があるだけで、肯定的な議論が十分展開されてはいないと思われる。ヴォルムスのある著作も（『物質と記憶』第四章は第一章の議論を深める役割を持つという議論配置の理解や、質的变化としての運動への注目という、重要な論点への指摘はあるものの）同様である。彼は、(1) 空間を占め空間的に拡がる行為 *acte* と (2) 時間的な保存の行為という二つを本性的に有するものであるという点に意識と物質との類比性を見て取っているが (Worms (2004, 136-40))、しかし議論の實質は両者を隔てる等質的空間の性質を否定することに尽きており、両者がこうした類縁的性格を持つとして、なぜそれが両者の交流の理由となりえるのか結局は述べられない。言い換えると、物質は、物質へのアクセスの障壁となる「等質的空間」の本性を帯びたものではない、というところまでしか進めていないように見える。

⁸ 同様の主張としてそれぞれ MM, 24-30, 160, 235, etc. および MM, 101-7, 120-8, etc.

⁹ 第一章と第三章の近接性に関して言うと、Theau も指摘するように、第三章のこの議論は、知覚に関して、有用性・実践性に起源を有するものとして捉えた上で論じている点で、第一章の知覚の議論と似た構造を有している (cf. Theau (1968, 312-3))。ただし本稿は、第三章のこの議論が第一章の議論の事実確認でしかなく、第一章に比べて新しい論点があるわけではないとする彼には同意しない。後述するように、ここでは、知覚の内容がどのようなものでなければならぬのかを、その条件から考察していると理解できると考えられるからである。

¹⁰ この点は、『物質と記憶』出版に先立つ講義 (1892-93 年の「心理学講義」第 19 講「抽象」) において指摘されている (Bergson 1992, 387-8)。なお、この講義においても以下で述べる『物質と記憶』のものと同様の困難およびその解消策が提示される (Bergson 1992, 390-3) が、しかしこの講義では、解消策の適用範囲が限定されることなく議論されてしまっている。cf. 本稿注 15.

¹¹ cf. MM, 170.

¹² 「それら敵対する二つの立場はともに、我々が個的な対象の知覚から出発するという共通の公準を有している。一方は枚挙によって類を構成し、他方は分析によって類を引き出す。しかし、その分析や枚挙が向かうのはまさに個的なものへであって、これが直接的な直観に与えられている実在だとみなされているのである。」(MM, 175-6)

¹³ 例えば Theau (1968, 298-9)。

¹⁴ (Bergson 1992, 388)

¹⁵ ただし、『物質と記憶』と異なりこの講義では、「異なる対象が促す知性的態度や知性的活動 *action intellectuelle* の同一性に明らかに起源を有する抽象的観念」も同様に扱われており、「数」の観念が「数える」という同じ活動から抽出されうるとされている (Bergson 1992, 392)。

¹⁶ cf. MM, 35, 176-7, 222, etc. 知覚であるために満たされるべきこととして、この他に、「可能的行動 (潜在的行動と呼ばれることもある)」であることも必要であると考えられている。言い換えると、反応行動の同一性によって可能になる一般性のうち、これら二つの条件を満たすような「行動」が可能にしているものだけが、生物の知覚を構成している一般性であると整理できると思われる。さて、「可能的行動」であるとは、簡単に確認すると、当の行動が因果法則的な仕方では引き起こされたものではなく、それがあくまで可能的な状態であること、「非決定的なもの」であることを意味している。この点が知覚を因果法則的に生じる単なる物理的過程や身体的な自動運動から区別する (MM, 34-5, 57-8, 100-1, etc.)。ここで、非決定的な仕方での行動の可能性を導入しているという意味では無視できない区別がされていることになるが、しかし他方で、この区別は無意識的なものを含めたいかなる「心理学的な本性をもった努力」(MM, 177) をも要請することがないという意味では、これらの差異はほんの「一歩」(MM, 177) である (本稿の論点は後者の点にある)。

¹⁷ ちなみに、知覚がまずこうした「一般的なもの」を所与とするものであることによって先述の悪循環から解放されるという戦略が採られている。cf. MM, 178.

¹⁸ 渡辺 (1978, 11. 強調は引用者による)。cf. 渡辺 (2011, 2.7 節)。

¹⁹ 「私の論じるところでは、知覚はすべて本質的に行動的である。知覚的経験は、知覚者の熟達した活動性 *skillful activity* のおかげで、内容を得るのである」(Noë 2004, 3)、「単なる感覚刺

激は、知覚者による感覚運動的の技能の所有のおかげで、世界を現前させる内容を持った経験になるのである」(Noë 2004, 183) 等。

²⁰ cf. McDowell (1996, 46-7)

²¹ McDowell (1996, 6-13, 53)

²² McDowell (1996, 186-7)

²³ McDowell (1996, 27-34)

²⁴ MM, 27-39, 220-6, etc.

²⁵ 「したがって我々の知覚は、純粋な状態では、真に事物の一部なのである。そして、本来の意味での感覚は、意識の奥底から湧き出てきて弱まりながら空間内にひろがっていくのではまったくなく、反対に我々が身体と呼ぶ特殊なイマージュが、これに影響を与える諸イマージュの直中で被る必然的な変様と、合致しているのである」(MM, 66-7; 強調は引用者による)。「我々の考えでは、ここで類似を引き出すのは、心理学的な本性を帯びた努力ではない。この類似は力として客観的に作用し、同じ相対的な結果が同じ深い原因に続くことを主張するまったく物理的な法則によって、同一の反応行動を引き起こすのである」(MM, 177; 強調は引用者による)。

²⁶ cf. Noë (2004, 198-9)

[参考文献]

Barbaras, Renaud. 1998. *Le tournant de l'expérience — Recherches sur la philosophie de Merleau-Ponty*, J. Vrin.

—. 2006. *Le désir et la distance. Introduction à une phénoménologie de la perception*, Deuxième édition, J. Vrin.

—. 2009. *La perception - Essai sur le sensible*, Deuxième édition corrigée, J. Vrin.

Bergson, Henri. 1896. *Matière et mémoire*, «Quadrige», PUF. (MM)

—. 1992. *Cours II*, éd. par H. Hude et als., PUF.

Jankélévitch, Vladimir. 1959. *Henri Bergson*, «Quadrige», PUF.

McDowell, John. 1996. *Mind and world*. With a new introduction by the author, Harvard University Press.

Merleau-Ponty, Maurice. 1942. *La structure du comportement*, «Quadrige», PUF.

—. 1945. *Phénoménologie de la perception*, Gallimard.

Noë, Alva. 2004. *Action in perception*, The MIT press.

Riquier, Camille. 2009. *Archéologie de Bergson*, PUF.

Theau, Jean. 1968. *La critique bergsonienne du concept*, PUF.

Worms, Frédéric. 1997. *Introduction à Matière et mémoire de Bergson*, PUF.

—. 2004. *Bergson ou les deux sens de la vie*, PUF.

石井敏夫. 2001. 『バルクソンの記憶力理論—『物質と記憶』における精神と物質の存在証明—』、理想社。

—. 2006. 「記憶と知覚の二元論」, 『バルクソン読本』, 久米博, 中田光雄, 安孫子信編, 法政大学出版局, 38-47.

杉山直樹. 2006. 『バルクソン 聴診する経験論』、創文社。

谷口薫. 1997. 「バルクソンにおける知覚と概念的認識について」, 『論集』, 東京大学大学院人文社会系研究科, 16, 100-11.

永野拓也. 2004. 「概念の実践的な足場: 『物質と記憶』の「一般観念」論をめぐって」, 『哲学・思想論叢』, 筑波大学哲学・思想学会, 22, 1-16.

渡辺慧. 1978. 『認識とパタン』, 岩波新書。

—. 1986. 『知ることということ 認識学序説』, 東京大学出版会。